慕氏兵論

四編

三四

イ 13
933
8

113
933
8

慕氏兵論第四編高級兵法巻三

曾田勇次郎　譯

大正十五年一月
花房仲治陸軍書店

軍營露營および寄舍

第四百十三章　軍旅の指揮官は軍兵の移陣戰鬪および軍の他の功勞に就て全く其勢力を勉勵せんことを其軍兵に要するものとして又其充分かる休憩および十分かる給養を具備するを以て適時に此勢力を養ひ且こゝを復さんことを知るを要す兵士の健康を促し且其勢力を貯ふるの諸規矩を取らんことを指揮官に乞并

に下將官にも屹と最緊要にして且第一の要務かなとを

軍の際に休憩の形狀に變をる所の軍旅を軍營露營或宿營に布置し得

第四百十四章　軍兵若し綿布の天幕の下或小屋の内に布營しあると雖にこをを名て安營せる軍兵といふかなを

已に往昔にも布營をるへ軍兵を軍中に休憩せしめんが為の通常の方法なを起各日行の後にも屢堤坊および壕塹を以て環遶をる營地を作

造し去りて軍營の訓習（軍營術）其時代の兵法の纔からさる部分を為しぬ十八時代の末に草命の軍を以て布營をるも多く不用に至をぬ初にはフランス國の軍旅天幕の不足よをこをを廢し且後には再餘の軍旅こをを廢しぬいうんとかをは天幕の携輸輜重列を莫大に增息しこをに由て軍旅の運動を甚妨くをはかなを

エンケルス國の軍旅に在ても軍營を常に用ひあをける去りをとも其軍旅千八百零八年よをを千八百十四年迄のスハニー國の軍にかゐて殊

に其害を發明しけるかて
フランス人もアルキールス地に於る其軍以來
所謂天幕の具を其軍兵に授けくてこをも鈕と
紐とを以て互に附接せる六片の綿布よて聚成
せる六人詰の天幕かて各人此六片の一を負ひ
且六人の綿布を併合もるを以て其六人に足き
るの蓋物を編制も
自餘の國にも尚平時の演習に就て布營を用ふ
たりしてこをの為に殊に永久の小屋よて聚
成したる布營甚利用かてともいうんとかをい

其軍營も兼て軍の初發に方て速に軍兵を併合
せんの為に供用し得をへかて又茲に尚軍中或
る模やうあて得ることセハストホルの囲城に
就て明白かるの如し此地におぬてハ軍營を用
ふるものかて
第四百十五章　露營に由て理會も屋宅も軍兵
を露天の下に布營もるの地位およひ方法こを
かて
軍營の不用に届るに由て漸々多く流行に及ひ
あるの露營い兵法の目的よて考察して軍兵僅

の瞬間に戰備しあつて且命令短き時間に皆に達し得るの大利あり」又露營を好天氣および便宜の天氣には軍兵の健康に害からざるといへども不便宜時候におかれて土地若し雪或雨を以て浸没あると雖には各露營よりは惡き宿營に選を歸もるかゆゑ出かし唯露營を布くに已を得さるに強迫もると雖に而已にても布くを要も」其已を得さることは若し多の輕軍兵を具有もる攻戰敵の近傍に在ると雖に在るかゆゑ故にたとへは前拒正面行軍に在て露營を布き且後拒

旋軍に就て露營を布くは規則かる為」又戰の後ち敵を逐從し或又逐從せらると雖大かる行軍に就て軍兵宿營を穿索せんと為に餘ゆゑ疲勞しあると雖には同やうかゆゑとも一言におかれて也ては彼此の方法にて軍兵を休憩せしむるとの危くある為雖と雖かゆゑ

露營の為に地位を選定もるには敵の攻伐を待さんと欲もる所の陣地の近く且同くは其後に在るに注意し土地高く且乾燥しあるに注意し茲に近傍に風を遮ゆゑ且木材の要用に供もるの

森林あるに注意せるを要せ」別して軍兵の為に水木材藁秣および兵糧ある居民の地位の近傍におかて布營せ亟し山大道の近くに在る露營ハ甚便宜かる亟しかりとも其露營ハ此道路を過て横に在るを得ハいかんとかきハ斯ること ハ軍兵の休憩を害せきハかア」露營よアア陣地の方によき道路達せるを要せかりして若し此道路あらさるときにハこきの為に縱隊路を開達せるを要せ」隘地の後に近ア露營ハ隘地の前に陣地を選ふの如く同く危しとせ

露營の為に地位の定まアあるや否にゲ子ラレンスタフを以て諸般の軍兵に地位を示せに目標を置くを以てし且夕に火を以てせ歩兵々別して大約三百歩の間隙を以て二横列に露營せ」横隊に露營せる各バタイロンの正面の長さにハ擺開せるバタイロンの取るの廣さよアア微多を算せ」かりきとも横隊にかるても或縱隊によおかてせ露營し得こきに地位の形狀に從て規律せ」歩兵ハ飲水に最近く布營しあるを要せ」露營定まアあるの前にハ軍兵露營中に入

るを得ばなりともこれを努て速に定まるを要す」露營を布くに方ても各バタイロン戰列に在て其處に示さるあるの地位に到るか」其上にて軍兵警衛の從事に命せらるる且差撥せらるる并に別隊も亦露營に要用の物時として又兵糧をも其近くに在る鄕村より取集めに往こんゝ為に命せらる」自餘の士卒ハ笈および草器を銃の後に置き且行竈の准備を為」なりとも前哨の出張しあるの前にハ騎兵脫轡し得ば尚歩兵ハ銃を伍架し得ば

ヂビシーンに部署せるの騎兵ハ露營の第三横列に充つるかまとも同くも馬を風に掩ひ得る所にて且こまを繫ぐんゝ為の良机ある所の其處に充つ」各騎兵にハ正面におゐて二歩を算し且班列間に三十歩を算」なりとも騎兵も努て多くもこまを近くに在る鄕村中に置く亟」砲兵およひ土工兵ハ其砲兵の進入し或離進せんゝ為によりて道路のある所にて輸車からひに砲類とも乾たあて且馬を風に蓋てある所の其處に露營を布くかて」なりとも自餘の軍兵

より餘り遠く遠離しあらさる所の其處に布營を輸車もこれに附著せる馬索の屆ふるやうに此の如く互に遠く二軸二軸に置くかゆ又馬の兩側に繫くかゆ

砲兵の為の露營に在てハ砲器を第一横列に置ふ彈藥車を第二横列に置ふ預備の輸車ハ施設し置く爲ふの鍛冶車を除ふて第三横列に布置を一砲隊の深さにハ百二三十歩を算もちゐて車營線に連結せさる砲間の距ハ六歩に迄て減少し得るもへに一砲隊の露營を大約七十五歩の正面の長さに至る爲ふ山藪水ハ敵の方に向け馬も砲類或輸車の間に致し且士卒ハ車營の後或其側面に在るかゆ火ハこれに由て失火の生し得さるやうに此の如く置くを要も

第四百十六章　宿營に由て理會ふ爲ふハ軍兵暫くの間或永ふ間土人に由て舍宿しある所の居民の地位にもかゆ

宿營ハ兵士の健康かよひ養口の為め各露營に超てこれを選定も爲ふくあるもへに軍におゆて其害かく成ゆ得る所の其處にてハ軍兵を居民

の土地にて屋下に致すを要すべし
露營の最害かる騎兵および砲兵は其唯稍成る
べく而已あるとき歩兵其利を失ふと雖も亦宿
營するを要す其上此兵の多の速度こと也に連結
せる艱難を減却せいろんとおもふ此兵は要用
の時期に在て速に宿營より陣地の方に馳入り
得ものかな
敵の多少遠離するの度目的および時候に從て
宿營を區別し得るに平時および軍時の宿營に
おのおのし其他廣狹宿營におのおのし又尚行軍

宿營囲城宿營および冬宿營におのおのも
平時におのおのは軍旅の宿營をすること稀也かり
あらもとも軍の起るべく催するとき此には通常
軍兵を國界に團聚し且宿營に置くかり此時に
方ては最初に唯軍事給用の注視而已を要用と
もこも住民を過多に苦るしむることなく軍兵
のよき所置に規矩を取らんの為かり
此宿營をよく規律せんことはゲ子ラレンス
タッの任に屬する所にしてこもる為にはまに
地方の精神物産監察の施行せらもるを要し

るかを
軍兵若し永代間住民に因て給養せるしを要せ
ると雖にハ中等に繁殖して且中等に活計せる
の土地におゐてハ各戸口或各戸（其中等の口
數四五人に至る）に兵士一員を算せ
軍兵若し一部分ハ軍倉より給養せらるゝとき
或宿營唯暫時の間連續せる而已かると雖にハ
一戸に二丁或四丁を算し得るかゞ宅地および
田畠の甚不同に區分しあるの土地殊に製作所
におゐて且唯僅の耕作而已ある所或不稔或他

の不順の損やうに由て收納を失ひる所の其
處におゐても損やうに從て此一般の規則を變
易せるを要せることハ論を待たさるを
總して・・歩兵一バタイロンにハ七千乃至一万
戸即三万乃至五万口にて足るとし騎兵一エ
スカトロンにハ百五十乃至二百五十戸即七百
乃至一千口にて足るとし一ヂビシーのスタ
フにハ一エスカトロンと同やうにて足るとす
せる事を中等の開載として取り得軍兵を務
て容易く舎宿せんと欲せるの途上にハ一コム

パクニーを以て小郷村を充て一バタイロンを以てハ大郷村および小城邑を充つ亟山ところのとなるとを一の野砲隊ハ一コムパクニーと同一ことを算一一の騎砲隊および騎兵一エスカトロンも亦二コムパクニーンと同一ことを算を宿營を規律をる方て注意をきたとへ此如く為せハ騎兵稍遠く隔てあるといへとも此兵を絲多くあて且厩多くある所の其地方に在る注意一砲兵ハ諸の時間に速に運動一得亟ものを為に大道或其近くに在る注意を大かる

城邑の前坊にして馬に供をるの厩および器物の修理に供をるの助術ある所の其處にも此兵最よく宿營一ある亟一通常も土工兵砲兵と同一宿營に舍宿一ある亦亟

軍旅の本營或ヂビシー或ブリカーデの本營ハ最よく軍旅ヂビシー或ブリカーデの宿營の中央に在る亟一ことを常に務て速に悉く命令を得せしめんを為亦亟又其本營の近傍におぬて或る郷村を守備せして置くことを甚可亦亟いふ亟一ことを法令に於る不同かることをよく

復さんを為かゝ

軍兵を務て戰列ゝおゐて宿營をすることと多し隊伍ハ務て一所ゝ宿營をすることと多しとも各兵別々ゝ宿營をすることハ十分ゝ要用かるゝあらばこゝを兵法の目的よゝし或馬ゝ供をする厩の為め三兵併合して宿營をすを要をすると屢かゝ

第四百十七章　廣宿營ゝ由て理會を為ゝ各戸ゝ兵士一員よゝも多を宿營せさる所の此の如ゝ宿營とゝかゝ此宿營ハ平時ゝこゝを布ゝ、

永き區武ゝ就てこゝを布ゝ且總して敵ゝ對して十分ゝ一の恐れもあるを要せさるとゝゝこゝを布くかゝ

第四百十八章　陜宿營を各戸一丁よゝも多を以て配當せらるゝこと時としてハ宿營して

る軍兵の員數民口ゝ同等ゝあゝ或又こゝゝ超

為ゝやうゝある所の其宿營かゝ

軍兵を此宿營若し纔の間からハ軍倉よゝこゝを給養し且宿營の周囲茲ゝおゐてを廣宿營ゝ就てよゝも小かるをへゝ本營を中央ゝ布置を

亟このごとくハ纔に要用かる亟し

第四百十九章　軍時に於る宿營ハ軍兵の所置および地方の愛惜に規矩を要せるの外に諸件の前敵に對せる警衛の規矩を要せ

敵の近傍に宿營しさる軍旅ハ軍兵宿營より一般の聚合所に併合し且戰備しあるまて宿營の蔽護を以て命せらるたる隊伍を以て敵を支駐せ亟く此の如く其規矩を取るを要す此時に方て八敵其近よるを前哨に識破せらるけるの後ち軍旅の統聚所に至らんろ為に費さくる亟か

らさるの時間其發進の報を本營に知ためんろ為と其他此本營より宿營の方に命令を施さんろ為およひ給に軍兵を宿營より統聚所に到らしめんろ為とに要せる槩しての時間よりも大にある亟きと要用かりとを宿營より聚合所に至るの距離知るあるもへに命令の達せるの後ち軍兵を聚合せんろ為め茲に幾多の時間要用かるこそ即少も大約自然にこを算定し得るかり唯前哨何時初て敵を識破せ亟きこの且此敵其進入に就ていこの永く蔽護隊に支駐せら

る而已なるのみなるも若し前哨あ
輕騎兵を宿營の為の前哨從事に就て說示しあ
る如くに此のごとく用ふるとなるに敵一の軍
兵の團軍をも聚合しあるとなる或此團軍其近よる
に方て直に識破せらるる而に其他蔽護隊にてあ
るを要もる如く獨立に聚成せる隊伍も甚尋常
の地形にて敵の識破せらるるとなるこを統
聚所より隔たるの距離を通走もるに敵一の軍
兵にも支駐せらるるさるとなる程の時間一倍半
を要用ともる其間此敵を止め得ることは經驗

あるかに故に此蔽護隊たるへは若し統聚所よ
り四時の距離に遠離しあると為る敵若し支へら
るさるるからも此距離を經過せんとの為に五時
の時間を要用ともるし故かるとも敵今こるを
為に即少も七時半を費さるを得さる而し故
らしてこるは過分からさる開載かりとも又
此敵多の時期に於ぬてこるを為に多の時間を
要もるし
宿營に於る軍旅の蔓延は敵の同勢および距離
に關係し其攻伐の陽誠の多少に關係し且蔽遮

もる地形の限隔の有無と關係をも多分に其憑據を川河山岳森林或池沼とに由て勢て蔽遮したる陜宿營と取るを要もの也しかのみとも屢地方の選定と逼るあるかをいうんとかをも宿營に多分或軍の初發と方てをを布紀或舉動中靜謐の際をを布紀且ちるとかに後ちと敵を攻伐し或敵の攻伐を待さんと思ふ所の其部位の迫くと軍旅を併合し得るを要もをかを蔽護隊最外の宿營とを遠離しあを得るの距離にをを確定せんを為め過多の損やうと關係

もの也し此距離に宿營處の周囲の半經と同やうと在るを要もるといふに規則かを統聚所に務て遠く後方と在るを要もの也しをと由て敵愈遲く此と到るの也し初代ナポレオン曰く千六百四十五年の在陣中將軍チレンヲかる者のメルケンヘイム地と宿營したる軍旅の覆擊せらをて討さをけるに聚合處餘を遠く前の方とあをけるもへと已を得さを紀とかを聚合處に宿營處の後と在るの也紀こと最便利かをとをてをと反して本營處も唯警衛の成るの也紀程さやうと

遠く前の方に在るを要することに由て上將速に前哨の呈狀を得且これに從て規矩を取て得るの利あるとを

第四百二十章　行軍宿營も舉動の經過の際軍兵各日行の終に夥くこれを用ひ此宿營も軍旅危險なく多く蔓布しあるへはさるもへしても軍兵行軍の後ち舍宿の為にこれを餘て遠離せる地位に遣らんか為に過多に疲勞しあるもへしても陜宿營に屬せることと通常かてとそ多分は唯軍旅の一部分而已宿營し得其間他の部分は宿營處の近傍に滞ることとある屢し且ちうるとなには其部分二三日毎に雙方交換せるを佳とそこれは千八百十三年より千八百十四年までの冬在陣中に多分これあて此ちるとも毎に宿營しあるかて

第四百二十一章　囲城宿營は城を囲まんを為めはひ十分強なる隊伍を以て敵を實檢しあらんか為にこれを布くかこれに就ても或唯城の守備兵而已を以てもるあて或これを救援せ

んことを務むる城外の敵を以てそることあ
得
城の守備兵を以て而已を屯ぬの時期とおゐて
ハ警衛の規矩城より隔たるの距離と關係を屯
し」こと」に就ても亦復ひ定まる時間の内に軍兵
の併合し得るに注意そるを要そこと」に就てハ
敵の企の多少の陽誠かよひ前哨の抗抵そる時
間を定規に取るか」歩兵騎兵およひ若干砲の
騎砲兵を籠むるを要そる城の直に近傍の宿營
ハこと」ろ為に多の配慮を為し且第二陣およひ

第三陣の併合よりも速かる併合の成るを要そ」
第三陣にハ通常重砲兵およひ准備物布營しあ
るか」
敵の軍旅若し城を救援せんか為の目的を以て
其近傍に在ると紀にハ模やうに從て囲ミを解
き或敵を併合して迎引し且こ」を討つ屯し或
若し同勢の員數斯るこ」とに適そると紀にハ城
を囲ミあり且軍旅の再餘の兵を以て敵に馳向
ふ屯し

軍中軍旅の給養

第四百二十二章　軍中軍兵に給養を供するの方法は用兵法の本來の學科にはよく附屬せるといへども以前に論載したるの補助學に附屬するかをるかをるとも茲に軍兵を給養せんこの為の術と舉動の學との間に此の如く密かる連結あること實に兩間髪を入れさるが如し且是故に軍旅の給養に配慮するは將帥の緊要かる功勞の一に屬するとせ

此從事に羅るの難事は軍場に在るの助術に關係し且軍兵不足に多く慣習しあて或繩に慣習しあるかの損やうに關係を免し

第四百二十三章　軍旅の用度に用ふるの方術は軍倉式宿營法および侵掠掠鄕に在るかなり

往古より第十八時代の末に至るまては軍旅殆と別して軍倉より給養せて草命の軍に方てフランス國の軍旅を軍倉かしに野戰しぬるころしてアラホリチ子　チュホトを好愛せさるたいかんとかきは世人ときに注意しつきはかを去るのきとともフランス國の執事軍倉を製造せんを為にはは一の方術もあらさるしもへにこきを

好愛し難き軍旅ハ侵掠および掠郷の方術ニ由て其在陣しつる所の地方の費用給養しぬ此所置ハ已を得さるニ發アしし所ニして用金の目的よアそる而已ならス尚他妹ニこと由て軍旅其運動ニかわて自由ニして且速かる行軍を成そもへニ直ニ大かる利あることと明白かアぬ此諸事件をフランス國の軍旅を助けて第一の戰勝ニ至らしめけることと僅かならさるものかアし自餘のエウロッハ洲の軍旅しエンケルス國の軍旅を除くの外し直ニ此例を踵紀且方今いたとへ軍兵の直の給養ニこと用ふるも或軍倉を供用せんの為ニも軍旅ニ給用をるの基礎とをアしたりして此例ハ復ひ茲ニアも回到をる紀をを希望を亟からス

たりとも此給養の方法ハ其諸益ニ就て多の損ある此損を見失ふを要せス

軍旅若し同し地方ニ或る時間滞留をると紀ニハ侵掠を遠紀距離ニまて蔓延せさる亟からス

こと敵國ニかわてハ強紀別隊かくハ成アあるハさるものかアこと由て軍旅ニも多の戰力

を減却し且此所置に於ては兵士と土人との間に激怒を發作せること屢かゝ此激怒は軍兵に遁さんとの為に敵と通信せるを以て諸術を盡さんの為土人に生せるものか

第四百二十四章　故に軍旅暫く同し地位に静立せるや否に軍兵を軍倉より給用せるを要せ此給用は規則正紀給用にして且最僅も土民を苦めを是故に舉動の速度若しこと脳まさるとき紀に軍倉式を用ふるを要せ

軍兵の此静立若し自國におゐてあるとき紀に城中或即時に築造せる地位に倉廩を置く就中攻軍に於ては第一陣の城中に置き且守軍には第二陣の城中に置くかを全在陣中に供用せるを要せるの倉廩および又籠城の形狀に准備しある城の倉廩はこれを名て全軍倉といふこれを及して倉廩若し唯充實に而已供用せるとき紀にはこれを名て半軍倉といふ

軍旅若し敵國におゐて同し地位に永く滞陣せるを要せるとき紀には其處に半軍倉を置くを要

も此軍倉もインテンタンセの注意を以てこれを實し運送に由てこれを實し或支給侵掠の方術に由てこれを實するかと

軍旅敵國に入るや否其上に其通行しける路上これに適當せる地位に倉廩を置く此地位を名て貯藏所といふ其貯藏所も雙方互に一日行の距離に遠離しあるを要す其守備兵ハ充足隊より遣るの士卒より成る其充足隊ハ要用の度に從て後ち復ひ他の士卒を此充足隊より收受するを以て軍旅の充足に供するかと此貯藏所のある所の道路をこれを名て貯藏線といふ

第四百二十五章　諸舉動行軍および運動に就て斯ることの成る所以を知るハ軍兵を土人に宿營し以て給養をするを通常かとし此給養の方法ハ大に利あるとも掌令官ハこれに僅の施設をも為をを要せい軍兵ハよく給養せらるもあるを日軍旅ハ自由に倉廩の連列より諸方向に速に運動し得るかと

宿營の方術に由て行軍をる軍兵の給養ハ尚ほ軍役に由て困窮せさるの地方におかて一の艱

難もかることなし」此給養たるとき以ては是故に軍兵の餘に遠く蔓延せることなく成に得いあんとかきハエウロッハ洲の中等に繁殖せる土地におゐてハ四乘一時行に二千口住居せることを算し且平均一日に兵士二重の員數をこきに宿營して去るとき茲に尚給養の不足を屢起こしとなし為し得是故に凡六万丁の一軍旅を宿營せる為にハ四乘十六時行の塲處に蔓延せるを要せ屢し故に幅におゐて四時行と深さ四時行なに去りしてこを敵の直に近傍におゐて行軍せさるとき起こに絶て最僅の艱難もあに得さるときハ」おゐてハ人民四乘一時行に二千口よりも却て多起に至る屢起こしに注意しあるを要せ屢しこきに由て城邑ハ餘に重く命せらる屢し去かして平均におゐてハ田舎に賦せるよりも僅の軍兵をこきに配賦せるを要せ其田舎ハ住民城邑よりも多く散蔓しあるといへとも又食料に就てハ城邑よりも大なる蓄積を具備せるものなり」軍兵を城邑に宿營せるを以て毎にこきを

小かる塲處ニ併合シテ保持セるの利を得
此給養の方法ハ輓近の軍ニおゐても多分行軍
ニ就てこれを襲用シ且エウロッパ洲の多の國土
ニ應用シ得たりしとも若シ纔ニ稔熟セ屆ル土
地ニおゐて或以前已ニ困窮シ且荒敗シあるし
所の土地ニおゐて同シ方法ニて所置せんと欲
シぬると知ニも尚甚誤ミて所置セ屆ル千八百
十年よリ千八百十一年までのポルトカル地ニ
於るマスセナ氏の在陣中および千八百十二年
のリス國の在陣中此害を顯ハしけり

第四百二十六章　掠鄕および侵掠ハ若シ敵の
直ニ近傍ニ在リ且是故ニ軍兵宿營せしめて露
營ニ併合シあると知ニこれを用ふるを要セ屆
ル小軍法中已ニ其施行の方法を論載シけり
掠鄕を以てハ唯大かる軍旅を稀れニ給養シ得
屆ル而已此掠鄕ハこれを為ニ分出せるの別隊
人家および納屋ニ貯藏セるの諸食料を穿鑿せ
んが為ニ十分かる時間あること稀れにおリ其上
多分ハ十分かる運送術ニ不足あるもへニこれ
を施行セること甚少かシ且これニ就ても費耗

或強暴ニ由テ尚ホ毎ニ大半ハ失カヘリ小カラ
軍兵の一部分即前拒側隊或奇兵隊の如きハ之
を用ふるヿ且用ふるを要セいかんとかきハ是
等ハ通常其給用ニ一の准備をも為さしめ所
の部位ニ到着し且軍旅の准備物のある所の地
位ヨリ餘リ遠く遠離しあるハかり
侵掠の方術ニ由テハ食料の取集却て規則正く
且又よく成るかり殊ニハ土地の執事ニきニ加
功し且軍兵を以て蓄積を取去らしして土人を
以て適宜ニてきを送らしむるもへかり若し時

日あるとなるハてきニ就て給養の區城を漸々
多く蔓延し得ヿし冨饒の地ニおゐて此蓄
積其倉廩を作造セるヿとニさやうニ大ニかり
得るやうニ此の如く諸事調達し得るとなるハ
殊ニ右のヿとを
一の土地ニおゐてハ實ニ他の土地ニ於るよリ
も大ニ難事あリ右クきとも其難事曾て施行を
十分ニ成るヿろらさるハ為さくるヿ唯一の
撲やうてきニ破格を為セ而已蓋し敵國ニ於る
退陣てきかリ軍旅若し屹と討きあリ且速ニ退

却もると紀元ハ土民侵掠ニ有功を授けんゝ為
ハ心底より好むゝあらさる屈ー軍旅敵國ニお
ぬて前進もるゝハ其背ニ倉廩を置くを要もる
ことハ是故なり

第四百二十八章　軍旅若ー掠郷せんゝ為或宿
營せらるゝ為ニ絶て時間あらさるほとさや
うニ大且急かる行軍を施行もるを要もるとき
或行軍若ー困窮或荒敗せる土地を過て往くと
きハ一二日の為め兵士ニ兵糧を附與もし就中
千四百十年ニおゐてマスセナ氏ハアルメイタ

地より コイムブラ地の方ニ行軍もるゝ此の如
くニ所置ー且スト　キール氏ハロサス地より
ハルケロナ地ニ行軍もるゝ此の如く所置ーぬ
（ナーヘール書および　キール氏の乎冊
ニ見も）ちゝーてフランス國の縱隊をアルケ
リー地ニおける其旅行ニ就て常ニ此の如く所
置も

通常ハ去かるとき四五日の為め蒸餅或再蒸餅
米および塩を各兵士ニ供用も騎兵ニハ此上ニ
三四日の為め秣を供用し其他各バタイロンニ

ハ或る畜獸を供用もてこをゝ為ニハ其バタイロン要用の度ニ從てこをを屠殺し且分配せんか為ニ自から注意しあるを要を時をしてハ尚此上各隊伍ニ兵糧を載せる輸車若干數を供用し且兵糧を載せる預備の蓄積を携輸せしむこを要用の度ニ從て隊伍ニ供用もるものかを去ゝををとも若しこを餘ア遠く蔓延もると紀ニハ復ひ軍旅の行列行軍およひ運動を遲引もるの艱難ニ陷ろかを

第四百二十九章　輓近ニおゐて給養物を担合せんゝ為ニ諸般の經驗を取アけるかアこを其給養物を僅の容積ニ減縮せんゝ為めおよひ此の如く為して兵士の為ニ携輸を容易ニ為さんう為かを」其成功ハ甚便宜ニあることく見也」フランス國の軍旅ニハ此上火酒の代用ニ香煎およひ砂糖を用ふ日々香煎の量ハ砂糖の如く同く〇〇一二子ーデルランド國ホンドニ定また」行軍ニ就ての大かる休憩ニハ各兵士其香煎を准備し其内ニ蒸餅を入也且こをを羹湯の方法ニ就て給食も」香煎ハ寒暖ニ就て甚養生ニ在

るとして考察をアルケリー地はおぬてハ寒暖の此往返稀ゝからゞ其上此飲料ハ勇氣を發をるかゝ此習風を再餘の軍旅は擬倣を要ゞ

第四百三十章　千八百二十三年のスハニー地は在陣中かよひ千八百三十一年ホーレン地の在陣中フランス國およひリュス國の軍旅を調達の方術を以て給養せゝるをも此給養の方法を若し調達人の送る所の兵糧の運送は從て舉動を規律をるとゝは斯ることゝして其配慮掌令宜は歸せゝるして調達人は歸をるを除

くの外は倉廩式の諸艱難を生をるの害あゝ且若しこゝは反して其運動をこゝは從て規律せさるとゝは時として其運送不足し且宿營或侵掠は由て軍兵を給養をるを要をこゝは由て此給養の方法を最高價かゝとも

第四百三十一章　若し今軍旅の給養は就て茲は用兵の方今の方法は由て簡約は説示あるの諸件を採緝をるとゝはこゝは因て敵國はおぬてハ軍旅を永く土人は因て給養せらるくを要をるを決し得ゝし軍旅若し靜立し或蓄藏

線を經て行軍をろと紀ゑハ倉廩よりて給養し若し敵の近傍の外ゑて殆と稔熟を爲紀地方を過行軍を宿營ゑ因て給養し敵若し甚近くゑ在ると紀ゑハ掠郷および侵掠ゑ由て給養し且若し僅の日數の為ゑ甚急行軍を為をを要をると紀或不稔或荒敗の地方を過て往くと紀ゑを兵糧を自身ゑ携輸をるを以て給養をるかて

山軍

第四百三十二章　山軍の術ハ實ゑ子ーデルランド國の軍旅の將官ゑハ平地ゑおゐて行ふ軍の術ゑあらさをハ纔も緊要かるゑあらはたのをとも軍史の稽核ゑハ此術又肝要かてとをいちんとかをハ此術かしゑを山岳ゑおゐて行ふ緊要かる軍を便利ゑ試尾し得るの地ゑ在らさる爲し

是故ゑたとへ又短文ゑおゐてをといへとも茲ゑ山軍を論載を爲し

第四百三十四章　山軍の性來ハ山岳自已ゑおゐてハ絶て大かる軍兵の團軍を併合し得さるゑ在るかてをを一ゑハ地形絶て軍兵の大かる

張列に適せさるハかゝ又一に八土勢平面に於るにあらさるハ僅も耕作しあらを且兵糧運送しかさくあるもへ給養に乏しをよゝして大かる軍兵の團軍を併合しあさかさるかゝ是故に右かるとを紀に八又山岳におゐて舉動を施行をるの軍兵ハ常に兵糧を准備しあるを要を通常ハ本勢を山谷に布置し其處に倉廩を置くかゝ右らるとも山岳に在るの別隊も亦或る持久を屈き宿舎に就て倉廩を准備しあるを要を山岳にかける通路ハ多分不足かゝををいろん

とかるハ道路平地よゝハ却て稀るにして且惡しけるハかゝ本路ハ規則におゐて山谷を過て達をるものにして山岳におゐてハ殆と連結をる道路あらさること陣地の一部位よゝ他の部位に到らんう為に屢大かる迂路を為さくる屈らさるハとに右うゝこを守禦兵若し時として舉動に就て別の道路を取ゝけるとをに八殊に此兵に大害あるものかゝ右ろ是とも攻伐兵若し舉動に就て別の一路を取ゝて連結をる道路の不足もへに同し一路を經て退却をるを要

もるとゝ紀ゝハ此兵も亦此害を發明もるかゞ
山谷ハ多分通常の形勢ゝかゝわて容易く踰越も
ゑくあゞといへとも强雨ゝ就てハ諸踰越具を
破却もゑ紀ゝとゝ此の如く卒然ゝ滿水し且此
の如紀壓迫を以て其沿河外ゝ流るゝの川河を
以て斷絶しあるかゞてゝもゝゝ由てとゝ紀としてハ
一夜の内ゝ沿河間の通路絶へ且ゝもゝゝ隔絶せ
らるの軍兵ハ最大かる不自由ゝ至ゞ得るもの
かゞ
大かる戰鬪およひ野戰ハ唯山の平面ゝ而已あ

ゞ得ゑゝして此平面も亦大かる軍兵の圍軍ゝ
ゝ稀もゝ便宜の舉動ゝ適もゑしてもゝゝ就て尚
ほ注目もゑ紀ハ此山の平面ハ唯其舉動ゝ就て
緊要の通路あると紀かよひ近くゝ在る谷路ゝ
緣て迂行せらゝ得さるとゝ紀ゝ而已功利を得る
ことゝ在るかゞ是故ゝ千七百九六年のイタリ
ー地ゝ在陣中リホリ地の陣地もフランス國の
軍旅ゝ最便利かゞ紀
哨地の戰鬪ハ山岳ゝ愈多ろるゑしゑこのして地
形ゝ便宜かる小分隊ハ大かろ過勢ゝ對して使

利ニ守禦シ得

第四百三十五章　此一種の性質山岳ニ軍モ亟ニ紀軍兵の聚成ニ感動を為サシめからひニ戰鬪ニ就て其兵法の用法ニ惑動を為サシむるを自然かてとモ

山岳ニおゐてハ歩兵を主兵とモるとと平地上よりモ尚ほ多シとモ云かシて諸戰鬪ハ殆と別して此兵ニ由て成るかゆえ是故ニ云ふるとハ紀ハ又此歩兵よく聚成シあて其班列中多の狙擊銃兵を計へ大かる行程を經過せんを為ニ疲勞モ

亟ならぬあて且峻急かる山坂を登ほらんを為ニ迅速鋭敏ニあるを要モ

騎兵ハ山岳ニて僅ニ要用のものニあて得故ニ此兵を數多くあるを要セモ云かシて輕騎兵よて成るを要モ此輕騎兵ハ所置シ得る所の其處ニて小分隊を以てこを為モ亟シ

砲兵ハ其射放の功用山岳ニてハ平地上よりモ纔かていうんとかをいハ其處ニてを其射放餘て鑽入シあをいかてこを加ふるニ此兵茲ニ運動シ得かさシ此運動シてさ紀ニおゐて實ニ山

砲兵を用ふるを准備しけるゝとも此砲兵ハ所用の性質よりして唯輕口徑のもの而已ゝあるを得

ゝとも火箭砲隊ハ向後こゝを山軍ゝおゐて多く用ふるに至るを目前かゝるとも千八百五十七年アルケリー地ゝおゐてカヒイレン人ゝ對する輓近フランス國の出陣ハ此彈物の勝ゝたることを確定しけり

第四百三十六章　總して攻戰の守禦ハ山岳ゝおゐて大ゝ利あるとゝいゝんとかゝハ此ゝおゐて小なる軍兵の部分屢暫時却て彈き敵勢を正面ゝおゐて抗抵し得又其間ゝ他の部分ハ敵の側面ゝ攻伐を企つゝきハかるこゝゝ就てハ地形の了解十分ゝ要用かるとも且こゝを為ゝハ土人の加功大ゝ利用かる可し

第四百三十七章　高紀山岳の守禦ハ一種固有の難事あるこゝハ給養ゝ乏しきのへゝ守禦の哨地高紀山背ゝ永く持久しあるゝ烈紀時候ゝハ茲ゝ寒氣堪ゝ可らしあるゝ且茲ゝ通路の道路ゝ乏しきよりして茲ゝ哨地間一の連結も

あらさるこをかてこをゝ由て各哨地其自己の守禦力ゝ委任せらをあるものかて
ゝ
ゝとも若し敵陣地ゝ近よて得るの谷路あ
よひ間道數多くあらをゝとをゝて
こをを適宜ゝ
守備し且强め得るとゝゝは守禦兵山背を過て
の踰越を敵ゝ爭はんゝ為ゝ多の机会ある亟山
こをゝ反し且此件山岳ゝ於る多の陣地ゝ發生
しあて攻伐兵若し陣地を廻行をるゝ用ふる多
の山徑は皆守禦兵の容易くこをを守備し得か
ゝ多の山徑を用ひ得るとゝおよひ此攻伐兵

若し此の如く為して守禦兵を背ゝおかゝて襲ひ
得るとゝゝは茲ゝ此踰越を妨けんゝ為ゝ尚亟
僅の机會もあらさる亟し
此の如ゝ山陣地の守禦兵ゝは常ゝ大かる害あ
るものかていゝんとかをは守禦兵たとへ攻伐
せらるゝ哨地ゝ施設を亟ゝ游兵を具有をると
いへとも其時此兵唯稀をゝ而已こをを助け得
をはかてこをを高ゝ山岳ゝおゝていこをゝ為ゝ
甚纔の連結道もあらさるをへかて」此山陣地は
通常十五時よて二十時の長さゝ就て雙方二三

時の距離と時とをもて六哨地および多の哨地を置く此哨地ハ守禦せらるる處うらさるかを」今攻伐兵若し此諸哨地を同時に迫脅せると紀とハこれに由て守禦兵を何の哨地を助くるを要するの不審に至るかを

速に傳信せんの為めおよひ一の哨地より他の哨地の方に汪進を致さんの為の設置茲に十分に要用かを」とを

若し山岳によ紀中央陣地あると紀とハ其山岳を便利に守禦せんの為めの机會多このる處し志

このもとも此机會高き山岳におかてハ多このらさ

」とを

茲に中央陣地に在て守禦するの軍旅ハ攻伐兵

其本勢を以て近よるを要するの道路に或る別

隊を前出し置く處し別隊ハ隔絶せらるくの危

險かく斯ることを遂け得るたけ其間敵を支駐

するを要を」攻伐兵其本勢を以て何の山谷を過

て押來らんとするの今明白にあるや否に守

禦兵ハ脱出する攻伐兵を妨けんか為め此兵に

出會を

第四百三十八章　山谷に於ける守禦の陣地を總して山岳に於ける守禦の陣地よりも宜しと雖も其處に於ては大なる軍兵の團軍を併合し得且守禦兵茲に其砲類及び其騎兵を用ひ得るか」此陣地は山谷の廣さ或長さに於ては」を取り得廣さに於て之を取るは攻伐兵若し山背を踰へんと為平地より山谷に入る時に在り且長さに於ては」を取るも敵若し側谷より脫出せるを要せると雖に在るか」

第四百三十九章　守禦兵若し山谷の廣さに於ては丘陵を占領してあるに注意せるを要す」其丘陵は強大別隊を以て」を守備せしめ且」を狙擊銳兵を多く加ふるを要す」別隊は敵丘隊を過て陣地を環繞せるを妨くるを要す其上山谷に在る敵の縱隊を側面に於ては襲ふを要せ」此別隊諸丘上および坂道を緣て撤兵を布置し且其助兵も退陣に供用せるを要せるの歩徑および道路を守備す」多く迫脅せらるゝ部位午道および敵陣地を環繞し得る所の

其處ニも游兵を布置もるを要も陣地而已ハ攻
伐兵の全勢を直ニ張列せしめ得も且砲類および
ひ放銃を以て此攻伐兵を正面および側面ニおい
ぬて射撃し得る谷隘の後ニ已を取るかゆ丘
陵ニ布置したる狙撃銃兵ハ殊ニ將官ニ照準も
るを要も」此の如く守禦もる陣地ハ走路陣地の
中央の後ニあるの利あゆともるかもとも又通
常河川ニ斷絶せらるくの害ある是故ニよ記通
路ニ注意もるを要も」又守禦兵ハ攻伐兵陣地の
背ニ在る横谷よゆ脱出して吾を環遶し得る

を考へあるを要も之ニ對してハ後方ニ游兵を
布置して遁るくを要も
守禦兵若し退陣を為もを要もると記ニも山谷
中悉くあるの新さかる陣地を後方ニ守備し得
るし
第四百四十章　山谷の長さニ於る陣地ニハ通
常正面の前ニ河川ある亟」此ニおゆても其陣
地を選定し且其軍兵を布置もるニ敵の脱出も
るを要もる所の側谷ハ環遶もる放砲を以て已
を射放し得るやうニ此の如くも」河川後の距

離若し河川を越て脱出する敵の縦隊を守禦の哨地より射撃せんか為に餘り遠くあると紀に沿河に陣地を取るを要す」とも其陣地へ背に河川あるべへに却て纔に便宜かりとす」河川へ退陣に就て安泰にこれを踰へ得んか為に多の強めたる踰越處を供ふるを要す」これに就て此陣地へ尚ほ走路通常陣地の正面の長延中に在るの不足あるか」此の如紀陣地若し截斷せらるゝとき紀に多の戰力を失ふか」千七百九十六年および千七百九十九年イタリー地お

よびガラーユウビンテルラント地に在陣中其証據あるか」

第四百四十一章　山岳に於る陣地に為すの攻伐も全く其陣地の形勢および敵是を守備しあるの方法に關係を亟しし

守禦兵の殆と寄りつかる亟うらもあり且唯に

よく建築しあるの或る踰越處に而已攻伐せら

を得る所の高紀山岳におめてい攻伐兵の企唯

大かる強暴に由て而已成就し時としても僥倖

および變動に由て成就す亟」此の如紀哨地へ

多分正面ニおゐてこれを攻伐せると兼てこれを環遶せるを要せ屈し此の如き八千七百九十九年フランス國のゲ子ラール官クユチンかるゝ者リムセル山の最高部分ニ在テ紀オーステン人の哨地を土人自己の登る屈らさるそしつる巖坂ニ縁て夜の際ニ登テ紀の縱隊を以て側面ニ於て襲ハしめ紀

守禦兵若しこれニ反して種々かる道路の方術ニ由て踰へ得るの山岳ニかゐて陣地を取ヲけるときおよひ其上これの為ニ共戰勢を哨地の

多さニ分解せるを以てかるる諸踰越處を守備しけると紀ニハ攻伐兵此諸哨地を同時ニ騷ゐて屈しこれ最僅の抵抗を受け或守禦兵ニ最大かる敗亡を授け得る此部位ニ其本勢を以て押通らんか為ヲ

守禦兵若し攻法ニ轉し得ると紀ニハ攻伐兵これニ屈せさるを要そあらさるも若し味方ニ過勢あると紀ニハ更ニ強く攻伐を遂くるを要これこれニ由て守禦兵を攻伐兵を廢せるニ已を得そあること速かかる屈し或ハらさるも守

禦兵の攻伐に用ひぬるの隊伍隔絶せらるゝの危險に及ふ所し

第四百四十二章　守禦兵若し其戰勢を併合して保持しけるとき は攻伐兵環遶せる運動に由て敵の退陣を迫脅せんことを努むる所しとき敵をして其走路に注意せるを以て退軍決せしめんが為めに環遶せる運動は平地におゆて至て危くあるものにして其危險山岳におゆて其處に連結せるの僅かる連結道に由て消滅せ又分隊を一脇側より多の攻伐に分別せるもこと同しとのゆへに山岳におゆていは平地に於るよりも纔に危しとせ

第四百四十三章　守禦兵若し山谷に陣地を取りて其陣地正面におゆて攻伐せらるゝ所のらさるとき は攻伐兵小かる監察別隊を以て地形および敵の陣地を監察せしむ所し此別隊は殊に其考を敵の陣地の方および其周邊に達せる道路および山徑に注き強めあるの部位に注き敵の哨兵の位置に注き且籍に敵の陣地を迴行して得るの道路に注くを要せ其後攻伐せる

に次の施設を為すかて
強犯游軍多分攻伐兵の全戦勢の半を山谷の入
口の前に布置し且其砲兵を砲列に致すこと放
砲を以て攻伐を准備せんが為かて志かして此
攻伐若し失策し得ると犯に敵の攻法に轉せ
るを妨けんが為かて」再餘の部分を三縦隊に分
かる」中央の縦隊ハ砲兵を具し且最強犯縦隊か
るを要そるものにして陣地の中央に為その攻
伐に定きて他の縦隊を丘陵よて敵を追却せん
が為および側面を攻伐せんが為に別隊を為せ

其縦隊を火箭および多の狙撃銃兵を供ふ此縦
隊の同勢からひに丘陵に遣る別隊の同勢ハ地
形および敵の守禦の施設に關係そ亟し
若し陣地を環遶しあるとさるとき犯に先つ敵
を丘陵よて追却せるを要そて志が為にを嚴兵
陣を甚強く為せを要そ助兵ハ山道を縁ふ游兵
を丘上の築造を侵奪せんことを務むるに火箭
を以てこきを襲ひ且銃槍を以てこきを攻伐せ
るを以てそ
敵を丘陵よて追却しけるや否に側面縦隊を以

て陣地の翼を攻伐せ」其間放砲および撒兵點放を以て山谷に於る敵の陣地を挑こけるの木縱隊今同く銃槍を以て陣地の正面に為せの攻伐に轉せ屈ーこと に就ても若ー正面および側面におぬて同時に攻伐を為せとせ紀ハ其成功疑ひかこの屈ー

イタリー地およびスウイツルラント地におけ る革命軍の在陣中よりも山戰饒多かりしせ

慕氏兵論第四編高級兵法卷三 畢

慕氏兵論第四編高級兵法卷四

曾田勇次郎 譯

川戰

第四百四十四章 大かる地形の限隔の周邊に在るの諸戰鬪に就てハこと子ーデルランド地の軍旅の將宦に絶て多く緊要のものにあらせ志ゥして其戰鬪ハ此將宦の注意せ屈紀誓核を要せること川戰よりも多こらぢいかんとかを ハ子ートデルランド地の天然の要害其河川よあ

河川ハ川戰の為ニこれを大河と小河ニ區別セ」
大河の種類ニ屬するものハヨウロッハ洲の諸巨
川かヒ小川の種類ニ屬するハ此水流の半かヒ」
此區別肝要かヒとセいうんとかヒハ大河の周
邊の戰鬪ハ全く小川の周邊の戰鬪よヒも他の
種類の者かヒかヒ
大ニして廣く渡る亟からしして深く且急流の
河川ハ國土のよ紀守禦線ニ屬セ」其廣さニ由て
他の沿河ニての砲類の放功妨けらヒ且軍兵の
踰越を完成しけるの前ニ此軍兵の全兵法の功

用妨けらヒ為しして亡ヒ為ニ固橋或舩梁
を要し其製造ニハ各の時間かよひ方術を要用
とセ」大かる川戰ハ將術の區域ニ屬すること兵
法の區域ニ屬するよヒも多紀ろもへニ後ち此
將術の學科ニ就て論載を亟し
ろヒとも大かる河川若し多の踰越所或渉津
地あると紀或其河中多の小嶋あると紀ニハこ
ヒニ由て大河の諸利守禦兵ニ失セ且今最早此
川を大河としして考察せしして小川としして考察
し且守禦をを要セ

第四百四十五章　小川の周邊の戰鬪を茲に吾この考察の主意を為せる一此戰鬪ハ次の摸やうにて成るかな

其一　若し河川を敵に障碍として考察せるとき之に守禦に就て論ずこと敵河川を踰へんとせるとき之を攻伐せんこの為かな

其二　若し敵の守禦せるの河川を踰へんとするとき之ハ攻伐に就て論ず

其三　若し敵に追ハれて河川を踰ゆるを要するとき之ハ退陣に就て論ず

此三摸やうの各を別々に論載せる一

第四百四十六章　其一〔守禦に就て論ず〕守禦兵河川の監察の後ち其守禦を為せる所の強き部位と弱き部位とを理會しある事」最弱き部位を務て多く強めしめ且別隊を以て守る事し若しこのことも攻伐に纔に露面しある河川の部分を是故に守らもして置くを要せず

河川戰の為め最弱き部位：

い敵の方より來る比隣の河川の河川中に流出せる所の處かな」攻伐兵を屹と其艇艇船

船および他の踰越具を運送し且其造橋の為の預備を准備せんこの為に此比隣の河川を用ひ得

ろ　守禦兵の侵棄しける河川中の小嶋かに此小嶋ハ屢架橋の工作を守禦も此小嶋若し材木を以て廣増せらるきあるとれにハ殊に敵かもとも又此小嶋に由て河川の幅莫大に減却も

は　河川攻伐兵の方に灣屈もる屈曲かに此屈曲ハ攻伐兵其越路を開れ得んか為充分に

遠く環遶の放砲を以て他の沿河より守禦兵を追却し得るの利攻伐兵に在て就中攻伐兵の沿河にて所領もる丘陵ハ攻伐兵の點放に便利の功用ある而し

守禦兵ハ此諸害の部位を害かく為さんことを務むるを要もこれこの為にハ比隣せる河川の河口に對向して堅固かる築造を築れ且重砲類を以てこれを兵備し河川中小嶋を守備し且時宜に從てこれを強め攻伐兵に便利かる河川中の屈曲に對向して砲臺を製造し此

砲臺よりて敵の砲類を側面より射撃し得且狙撃銃兵若し土堤の後より蔽蔭せしめて布置し得るとき ハ此狙撃銃兵の為に埋伏處を作るを要す」攻伐兵より便宜かる地形物小森郷村人家の如き沿河に近く在るものハ守禦兵ことを守備し且強むるを要す」其他河川に在る諸橋梁若しくハ橋頭築造に由て強めらるあらさるとき ハ守禦兵此橋梁を斷たしめ渉渡を為き地位を用ふ為このらしめ為し且守らしめ諸船艇および筏ハ河川の此岸の方に致さしめ且小嶋の後或河川の灣屈中に隱し且上流にを重き物体時としてハ焼具を准備するを要すこと浮流に由て敵の橋梁を破却せんを為かた

時として川河小川に平行する流水かたこと

つ土堤を築き以て沿河に縁て湛水を生し之に由て河川の一部分を敵に遁るしむるかた

第四百四十七章　小河を守禦する為の軍旅同勢におゐてハ河川の長さに平均しあた越路を試驗する為き敵の同勢に平均しあるを要す」此軍

旅を迅速に運動せ𡚁め軍兵よりて聚成しあるを
要せ歩兵にも多の狙撃銃兵あるを要せ砲兵い
迅速に運動せ𡚁めくして屹と重砲よりて具備しあ
るを要せ且砲兵の同勢も戰鬪のある𡚁め土地
の形狀に関係せ
軍旅も敵守禦兵の沿河に確據を得ける以前に
各踰越所に到着しあるを得是故に敵尚ほ踰越を
完成せんことを務むる其間に之を攻伐し得
るほどさやうに河川より遠離して河川の後方
に中央陣地を取るを要せ

長ち河面の守禦に就て動きい軍旅此の如ち陣
地の二を占むるを要せ𡚁しあるとも再時に
も茲によき通行の道路あるを要せこと軍旅速
に併合し得んが為ち
茲に若し中央陣地より遠離せる或る部位にて
敵河川を踰せるの難事あるとち𡚁に騎兵およ
び充分ある砲兵の附置しあるを要せるの行軍
縱隊を此部位に對向して中央陣地中に布置せ
𡚁しことも實撿別隊を應援せんの為ち」こと
に就てハ此縱隊軍旅の如くに擧止せ

第四百四十八章　河川を直に守るを實檢別隊を以ても此別隊ハ務て多く沿河に在る弱、兵部位の近傍に布置も

其同勢および聚成も此部位の多少の緊要に關係し并に其守らさる區こらさる河川の部分の長さに關係を其擧止則ハ小軍法中に條例せて此別隊ハ間者および斥候に由て務て速に敵の報を得んことを務む此斥候ハ夜る小艇を以て他の沿河に移ることを其處に在て殊に河川の方に達せるの道路を實檢せんこの為かていかんとかを

ハ多分敵夜る此道路を緣て其砲類其艙船および他の器物を持來も區けをハかて

河川を踰へんか為の敵の目的を識破せるや否に軍旅ハ號哨の方術に由て直に其報を得區したゝしてよく規律せる指揮使の事務に由て此注進および此ことをよて出るの命令を守禦勢の諸般の分隊に命を攻伐の眞の部位を陽攻よて區別せんことハ毎に難知開載かてとも此陽攻ハ敵たとへ其部位に軍兵を顯ハせに由てもたと

へ其目的に就て虛說を吹聽せしむるに由ても

河川の諸般の部位ニて施行し得眞の攻伐ニ准備をるこの微候ゝ敵要用かる橋梁の器物を集一し砲臺を築造し且其諸般の兵隊を踰越の部位ニ行進せしむるニあるかゞ」斯るこをを識破をるや否ニ近くニ在る別隊ハ踰越所の方ニ急行し且其處ニ到着をると紀ニハ放砲および狙擊鋭兵ニ由て橋梁の架作を妨け即少もこをを遲引せんこをを努め其他敵の軍兵の編艇の方術ニ由て渡川をるを妨け且此の如く為して努て永く敵の軍旅ニ渡越を爭はんこをを努む此

攻伐若し夜おあて得るとき紀ニハ敵の作業を實撿せんか為ニ號火および燭彈ニ由て周邊を照らをを要を

第四百四十九章　今敵某の部位ニて河川を越をることの審このかるや否ニ守禦兵の軍旅最速ニ中央陣地ニて敵ニ出向ひ且こをこの為ニ急運送の諸方術を用ふこをを尚ゆ敵の全軍旅河川を踰越しあるの前ニ努て敵を攻伐せんか為かゞ」敵若し多の部位ニて踰越しあて得るとき紀ニハ守禦兵ハ敵の本隊他の部分と併合し得けるの

前ニ併合せる勢を以て務て急ニ敵の本隊を攻
伐モ為し
此諸戰鬪ニ就てハ守禦兵併合しあるの利および
ひ退陣の自由ニあるの利を具ふいこのんとかを
も攻伐兵ハ背ニ陵地し河川ニ架したる橋梁し
を以て戰を為モを要モを之ハかを」此摸やうニ就
て利用を為モを河川守禦の此方法のおもかる
強ミかを之とモ」カラユセウイッかる者ハ河川
の守禦ニ就て此主意を最よく諸書記ニ論載し
けるものニして千七百九十六年イタリー地ニ

在陣の其書記中オーステン人ミンシオ河の守
禦ニ此守禦法を應用モるを要しけるこをを例
証して著ハしぬ
第四百五十章　其二　〔攻伐ニ就て論モ〕河川の
渡越ハ軍中最難く且最危を企ニ屬モといへと
もよく守禦せるの大かる河川の渡越ハ特ニ志
かのこをモ
志ゥ之をも河川の形狀および雙方軍旅の形勢
こ之ニ大かる感動あらしむ為をこをハ自然ニ
して小かる河川ハ船梁を以て踰越モ為くあを

且其僅の幅他の沿河ヨリて放功を妨けさるもの
ヨリして渡越ヨリ就てハ大かる河川よりも僅の難
事ある亀紀ことも亦自然かりとも

第四百五十一章　河川の渡越を成就するハお
もヨリ次の三款條ヨリ關係も

其一　踰越所のよりも選拔ヨリ關係も

其二　此踰越所の為めヨリ敵を私誘もるヨリ關係も

其三　踰越ヨリ供もるの方術かよひ此踰越を
施行もるの方法ヨリ關係も

第四百五十二章　踰越所の選擇ヨリ就てハ最容
易の方法ヨリて河川を何處ヨリて踰越し得亀紀ろ
を決定せんが為ヨリ兵法を穿索もるを要もる而
已からス尚又其上ヨリ將術を質もを要もたこの
で此將術ハ踰越の完成しあるとも其踰越大ヨリ
利あると兼て味方の走路を危險ヨリ致さくる所
の此部位ヨリ選拔を歸もを亀し
將術の論載ヨリ就てハ斯ることを精く註解を亀
し兵法の目的ヨリ於る最便利かる踰越所ハ既ヨリ
河川の守禦よりとして學知りぬ此踰越所ハ河川

最僅の幅ニシテ且最僅かる流水の速度ある所の所および渉渡を爲紀地位或渡越を容易ニ爲もその小嶋ある所の所ニ在る爲ニ
小嶋の利を千七百九十六年および千八百零九年レイン河およびドナユ河を越てフランス國の軍旅の渡川ニ就て瞭然たり
河川の底ハ上紀錨地かるを要を爲ニいちんとかをハシリク地の戰の後千七百九十九年オーステンレイキ人の踰越を失策せしめぬるアール河の巖底ハてをかりへかりてをニ就

てハ千七百九十九年カラユセウイッツ氏の在陣を學ふ爲ニ
右ハをとも踰越の部位ハ若シ比隣の河川ニおぬて寵ニ踰越具を准備シ得ると紀或若シ茲ニ此沿河ニ城邑ありて此ニ諸の踰越具具備シあると紀又若シ他の沿河ニ便宜かる歩兵陣地ありて最初ニ渡川せる軍兵此ニ籠居シ得ると紀（千八百零九年の在陣中ドナユ河ニ在るアスペレンおよびエスリンケンかる鄕村のかく右ゥリて）および終ニ遠くニ在る地形便宜の戰地

かるとなるにハ特に便宜かる可し

第四百五十三章　踰越所の為に敵を私誘せるハ狹なる河川に就てハ廣なる河川に就てよりも却て大かる利あるとせいりんとかきハ狹なる河川にも船を以て暫時に浮梁を架し得きハかを眞の踰越所の選擇ハ何に由ても知らる可くあらさるを要も此選擇を定むるに河川の監察の行ハきんこと若し要用に在て得るとなるにハ最大に隱密の姿勢を以てこきを施もを要も行進の速度ハこきに就て敵を私誘せんの為め

毎に最よなる方術かてとせいりんとかきハこきを
に由て敵よりて以前踰越所に到きハかて
又他の部位にて軍兵の一部分を以て河川に近
よて且虛說を吹聽せしむるに由て佯勢を用ひ
ちりきとも此佯勢を行ふる方てハ眞に他の沿
河に移らさるを要もいりんとかきハこきに由
て部分々々に討さるしの危險に臨めかて
ちりきとも多の部位にて河川を同時に踰越せ
んこととも唯大かる過勢に就て而已過失かしと
いふ可しとかて斯ることハ千八百十四年同盟

兵レイン河を越るの踰越ニ就てあてけるゝ如
し

第四百五十四章　渡越ニ迄ての方術ニ關渉し
てハ已ニ上ニ説示せる如く甚廣からさる河川
ニ就てハ殊ニ船を用ふ此船そことの為ニ充分
かる員數を携輸せるを要も其上軍兵の渡川ハ
若し多の艇艇を供しあると紀ニ甚主張し且こ
ゝを以て又或る砲類を渡越し得んことを願ふ
亟しとす

第四百五十五章　河川の踰越の成る亟紀時刻

およひ部位の定アあるや否ニ遠離せる部位ニ
て烈紀放砲を發し以て敵の思慮を眞の部位ニ
アニ退けんことを務む
通常ハ日の暮ゝ或夜の明るを以て踰越を始む
明黎を以てせるハ若しよく設置せる放砲ニ由
て守禦兵を沿河ニアニ追却せるを要せるとおも
よひ眞の踰越所ニ就て守禦兵を私誘し得ると
紀ニ成るかアニ此時ニ方てハ器物およひ船橋兵
を具せる前拒第一の攻伐を以て奉命し且造橋
を以て奉命しあるかアニ

守禦兵若し踰越所より軍兵の一の員數も具有せされとも或唯僅の員數而已具有すると雖も橋梁の製造軍兵の渡川および砲臺の作造を以て一時より始むるし且こをより就ても不時の攻伐を為し或砲兵點放を發するを以て餘すに以前より守禦兵を騷かさらんを為より注意をたこの事と也守禦兵若し他の沿河より砲類を砲隊より致しけるときより造橋を始め得るの前より先つこを黙せしむるを要するし此と也より方ては十二ホンドル地砲の砲隊を用ふるを要す此砲隊は十字放を以て他の沿河を射防し且敵の砲類を或破却し或遠離するより已を得さらしむるやうに此の如くこを布置すこと也より就ても中砲特に多く要用かるるし砲類の布置は其後此砲類軍兵の渡川を妨くることなく橋梁より就ての工作を守護し得るやうに此の如くあるを要す軍兵の渡川を大より迅速を以てすといへとも兼て班次を以てし且間斷かく陸續するを要す歩兵は多の狙擊銃兵および又土工兵あるものにして守禦に設備せんを為め他の沿河にて諸の

地形物よりて助けを得るを要し且ことゝの為ゝも時として築造を為すを要す此兵若し火箭を具有すると紀ゝハ敵の騎兵ゝ對してことをよく用ひ得るゝ茲ゝ今又或る野砲類ある爲紀多の軍兵渡川する度ゝ從て此軍兵他の沿河ゝて蔓延すといへども常ゝ已ゝを守禦ゝ設備せんと欲ゝ注意をいゝんとかゝハ踰越の成就ハ全く此軍兵の持久し得るゝ否さるゝゝ關係を爲けゝハかゝ

橋梁の准備しあるや否ゝ軍旅ことゝを踰ゆ通常

ゝ野砲および騎砲一砲隊且騎兵一二エスカトロンスと俱ゝ六乃至八バタイロンスの前拒先進すゝ橋梁を軍兵の渡越ゝ皆まんゝ為と兼て敵の破却する方術ゝ對して守護せんゝの為の諸規矩を取るを要し且ことゝゝ方術あると紀ゝハ一橋梁よりも多く多分ゝ三橋梁を作りて其正中ゝして最堅牢かるハ砲兵および輜重ゝ定め外側かるゝ歩兵および騎兵ゝ定めあるかり

第四百五十六章　其三　退陣ゝ就て論ず軍旅若し敵ゝ追ハゝ河川を越て退陣を施すゝ前以

て規矩を取ることかくこゝを行ふを要セるとなるハ此軍旅の形勢甚危しとも」こゝ多分ハ將術の失策のゆへかゆゑ此矢策ハ今兵法を以て助けさる為こゝらを」茲ニ若し此河川ニ橋梁あゆゑて橋頭とし て考察セ為くあるの野堡障或建築せる城邑ニ由て蔽蔭しあるとなるハ此形勢心痛セるを要セるかし」千八百零九年レーケンスブリュフニて第一等のヘルトフ官カーレルかる者の渡越ハこゝきこの為の證據かゆゑとも」（こゝニ就てハ此在陣中の書記を見る為し）

今軍旅の渡越を急かんゝ為ニ船橋を以て河川の踰越所を増息せんこゝとを勢め且輜重軍およひ軍旅ニ欠け得るの諸物を河川を越て送ゆゑ其上ニて軍旅ハ橋頭の方ニ行進セこゝ其處ニ陣地を取ゆゑ且敵ニ逆ハんこの為かゆゑ其間ニ軍旅の諸般の部分橋梁を前後ニ踰セこゝ新ニ河川の後ニ陣地を取らんこの為かゆゑ後拒ハ退陣を守護し且其後ち橋梁を踰越セこゝニ就てハ既ニ橋梁戰ニ就て註解しあるゝ如くニ所置を

第四百五十七章　茲ニ若し河川ニ一の橋梁を

あらさるとき退却をる軍旅の形勢ハ全く志の
らに且甚考料を要とを掌司官渡越に決斷し
且河川の踰越所を定めけるや否に船および渡
船を具せる別隊此部位に遣らる此別隊ハ大に
迅速を以て行進を完成し且兼て味方の軍旅に
も亦知らしさるはとに此の如く多の隱密なる
姿制を以て其部位の方に行進をるを要とを此部
位に到着してを橋梁を架し且築造を為をを以
て橋頭を製作をるの初發を為をかとを軍長ハ其
間佯運動に由て敵を私誘せんことを務む時と

していてをを為め攻法の陽運動に轉をを志のを
とも橋梁および再餘の工作完成しあらんこと
を料察し得るや否に退陣を始む
輜重軍ハ前以て送て遣らる殊にを此輜重軍軍
旅を不便宜の陣地に止駐せさらんを為め以前
に發進をるに注意をるを要をを通常ハ日の入と
俱に隊伍務て大なる靜肅を以て一隊つゝ離進
を前哨ハ停立し露營火を燃しある強く且よく
聚成せる後拒ハ橋梁の後方に陣地を取て以て
河川を越をる軍旅の退陣を蔽護に

此の如き形勢よりおのれてフランス國の軍旅ハ千八百十二年の在陣中の末ヘレシナ地より て訳ぬことより就ていハ世人此在陣中の諸般の書記を穿索し得

輓近の軍の軍史中より學ふ可き川戰の數多あるに其聲依甚需めらるゝものかを就中ことより供用し得るゝ〻千七百九十六年モレアユかる者より由てレイン河の踰越ハ第一等ヘルトク宣カールレルかる者の書中より在るに千七百九十六年ボナバルテかる者のホオ河の踰越ゝカラユセウイツフかる者および此在陣中より就ての他記者ことを書記し千八百零九年ロフ　アユエ嶋のナポレオンかる者のトナユ河を越ゆる踰越ハペレット氏および此在陣より係る他の記者ことを書記し終より千八百三十一年ホール地の軍旅のウエイクセル河の守禦ゝ此在陣中の諸般の記者ことを記載せるものの是かを

野戰

第四百五十八章　野戰より由て了解を可き八二敵軍の間の緊要かる戰鬪是かを

野戰ハ一の敵若し他の敵に充分かる戰勝を返報をるとたにをこをを名て決戰といひ若し戰勝兵たとへを戰力に敗亡あて斯るこをを妨くるも騎兵に不足あて其原因とかるも絶て其利を用ひ得さるとたにいこをを名て不決戰といふかて

敵の戰力を破却し以て此決戰を得んことを每に野戰の大主意とをるを要を唯こをに由て而已軍の便利かる決定を得

第四百五十九章　通常野戰を區別をるに攻法

野戰かよひ守法野戰にかをてををとも此區別ハ正しこのらさて とをいうんとかをハ同し野戰一の軍旅にを攻法に在て他の軍旅にハ守法にあをハかて

軍旅其對敵の陣地を攻伐せんが為め前面に驅進をる軍旅ハ屹と攻法の野戰を為し此攻伐を待つ所の他の軍旅を守法の野戰を為もかて右このをとをこをハ一野戰の經過の際屢其位任を交換し戰地の或る部位にてハ攻法に所置し且同時に他の部位にてハ守法に所置せんことを

兎の色に赤くして野戰を攻法に始めぬる軍旅屢ことを以て守法に終て且反對せるを要せる

火兵の改革および此所以たる建築陣地の適宜なる用法は守禦兵に多の利あることを既に早く注目しけるかこ

ことに就ては其他に說弘めせして宜く野戰に於る攻伐兵の所置および守禦兵の所置を逐次に著述せんこの為に轉せる「たくさとも此著述は或る一般の法則に迄てからては其他に說

弘めさるを惜しいかんとかきは野戰をいかに為せを要せるこの方法には絕て固定の規則あるはさきはかこ輓近の著明かる野戰の理學狀の稽核は唯其或る理會を得る而已かて

第四百六十章　軍長若し戰力に過勢あるに由て或他の便利かる摸やうに由て成功を望を得ると紀曾て野戰に逼るを要せば且一の野戰をも為せを要せさるを一般の法則と為し得野戰を為せに方ては其軍長攻法に所置せんと欲せるか守法に所置せんと欲せるかの區別かく其

第一の注意ハ尚旧成る亟くあるに旧との軍兵を戰地ニ併合するニあるかア

兵數の多紀を常ニ戰勝あるとも よく為し得も いゝんとかきハこきも軍史ニ由て虚言ニ罪せらるきハかアたゝきとも此兵數の多紀ハ戰勝ニ机會を増息せんこの為ニ助くること多しと為し得こき絶て疑を受くるか」今全軍の決戰屢野戰ニ關係するもへニ戰勝ニ多の机會を得んゝ為ニ何も怠らさるを要も」是故ニ一の軍兵をも已を得さることかく分別し得もしてこき」を務て多く一所ニ保持するを要も初代ナポレオンかる者いへるか如く單一バタイロンの目的ニ於戰勝あア得るといへるを考料し且共野戰の誓核彼きも常ニ此きを規則ニ應用し且多分ハこきニ由て戰勝を得つることを其野戰の誓核ニて矩きア

たゝきとも多の戰力を戰地ニ併合しけるを充分からもとも是を又適時ニ用ひん事を知るを要もいゝんとかきハ之顯ハきある軍兵ニあらも戰勝を得る所の所置もる軍兵ニあきハかア」

第四百六十一章　軍旅の掌令官若し敵の軍旅
に為せる企図の攻伐に決しけるとせは此敵軍
の同勢形勢および陣地を了解しあるを要せ唯
此了解に由て而已此掌令官其攻伐の算を確定
し且軍兵の發進を規律し得たるこの事に此了解か
くも大なる過勢に對して戰ひ或陣地の最強な
部分に對して攻伐を為せの危險に臨む企て
前世代の軍におゐてはこれを為に所謂大監察
を用ひ且オーステンレイキ人は輓近の軍におゐ
ぬて又尚ほ近屬イタリー地におゐぬて尚又多分

其敗績にこれを用ひけり
此監察は通常戰の前日軍旅の一大部を以て施
行せり是を以て敵をして其戰勢を張列せしめ
んことに強迫し且此の如く為し得たる了解に
して次の日の野戰に施設を確定せしとい
ふ守禦兵は此監察戰に由て敵の目的を識破し
且其自己の陣地に於る最弱き部位を發明して
今は夜る其軍兵を移つし且此最弱な部位を強
むことに由て攻伐兵に其に監察の全目的違ふか
ぎは又輓近の軍に於ては大監察を廢し

且是に換るに前拒戰を始けて
將帥ハ以前に得たる報告に由て敵軍の同勢か
よひ形勢を以て了解し居る而し此將帥又大約
何處にて此軍旅に出會せ而如かを知る而し且
こゝに由て其軍旅の發進に一般の施設を規律
せるの地にある而し
今將帥の在陣せるを要せる其前拒の戰鬪に由
て此將帥其他敵軍を精く監察せるの地に在る
かて是におゐても其輔佐の將官に加功せらゝ
尋て地形にて敵勢の張列およひ此勢の為せ所

の抵抗よりして此同勢を殆と算定し是に就て
具せる從前の開載と比較して之を戰勝に至る
机會の算定に就て定規に供用し得而し
此の如き算定ハ今軍兵を別して敵陰せる地形
に布置し且敵の眼目に通ずるとき如き難き開載
かてとせるうしてこゝハ此世代の初代ナポレ
オンかる者の最大名かる將帥千八百十五年リ
クニー地の戰の前其監察後フロイセン地の軍
旅の陣地を失誤して判斷しけることよりして
殊に瞭然たて

第四百六十二章　敵陣の監察に就てハ上將其攻伐を最便利に設置し得るを期し其部位を目的とするを要す

此攻伐所ハ通常將術の攻伐所と兵法の攻伐所とに區別を將術の攻伐所ハ攻伐の成就に就て在陣に大利あり兵法の攻伐所ハ此目的におゐて恐らくハ總に大かる成功あるといへとも攻伐而已を成就せんかの為に多の机會を得るを去るのみとも攻伐兵何の部位を選定し得るとも毎に此彼の重要かる地形物の在地に到らんと

とを務むるを要す陣地の保持ハ屢此在地に關係し且是故に去るとき又其在地を名て陣地の鎖匙所といふかり千八百年マレンコ地戰におゐてカステル　ケリオロかる鄉村千八百零五年アユステルリッツ地に在るフラッセンの丘陵千八百零九年此名目の戰におゐてクロスセアスペレンおよひエスリンケンかる鄉村千八百三十一年コロクオウ地に在るエルセンホッシーかる小森ハ此の如くあり

第四百六十三章　攻伐を施行するを要するの

方法ハ一の規則ニも關渉しあらさるとを攻伐の形格を守禦をる軍兵の中央且右翼且左翼ニ所謂戰列の班次よりを導ち得んことをよく務めけるゲ子ラール官ヨミニかる者ハこをの為ニ又十計を聚成しけるをもとも事件の正ち理會ニ窘蹙をることかく此形格を次條ニ定め得る也ト：一翼および兩翼ニ為を環遶且一翼の環遶と又兼行ひ得る中央ニ為を斷截こをかる其上此攻伐を連結して施し或別々ニ行ハを得又陸續或一齋ニ成を得

攻伐をる隊伍若し其部屬をる所の軍旅と連結し且軍旅の千變万化ニ由て應援せらるゝとち攻伐の攻伐を是を名て連結せる攻伐といふかる攻伐をる隊伍若し全く獨立ニして且軍旅よりを別ちをあるとちハ此攻伐特別ニ成るかる攻伐若し一隊伍の攻伐の功利を他の隊伍の動作をる以前ニ希望をるときニも陸續ニ成るかるこをニ反して若し指示せる合圖ニて諸般の攻伐の一時ニ施行せらるゝとちハ一齋ニ成るかる

今攻伐の形格を精く著ハその以前に軍兵全正面に分つ也且一齋に攻伐をる所の攻伐を所謂平均の野戰にして一の成功をあらさることに注目をいうんとかをハ陣地の或る部位にて得たる戰勝を他の部位にて受けたる敗績に由て全く復ひ平均し且或る所にて十分強く所置し得るをへに又或る所にても決戰あて得所謂斜向戰列に於る攻伐ハ七年間の軍にあわて屢あるう如くに正面變換に由て或側面行進に由て方今多く可かあてといふ面し

第四百六十四章　攻伐兵を常に眞の攻伐所に就て敵を務て永く私誘し且守禦兵の軍兵を此部位よて引出し以て務て其處を弱めんことを務むるを要をることを一般の規則と為し得此目的にて攻伐兵を眞の攻伐所よて尚全く稍遠離しあるの部位にて陣地を攻伐せしむるを要をこを也守禦兵の諸思慮を陽迫脅の部位に誘引せんう為かて志このるとにを此守禦兵其戰力を全く容易く其方に移をを面し此戰力に後ち眞の部位に攻伐をる方て十分速にハ復しあた

ハさる為し

敵の思慮の此の如き誘引を名て側攻といふと
きは敵軍を他所より勾引するに供し且こゝに
為るハ敵其處におもかる攻伐を見ハそやうに
此の如き勢を以て行ふを要そ
攻伐兵ハ其他眞の攻伐所の近傍に在る敵兵此
部位に助け來るを妨けんことを務むるを要そ
此時に方てハ攻伐兵佯勢を用ふ為し精く去へ
ハ攻伐兵攻伐を以て他の部位に迫脅を為し去
かしとも此攻伐ハ施行するに至らさるとも

此の如く為して守禦兵若し何事をも企てさる
やうに此の如く挑まるゝと雖ハ此兵屈せそ
若し事を企てんこと此兵に十分容易からさる
と雖ハ此兵和せさるかそ
今攻伐兵若し茲に正に時机在るを見ると雖ハ
務て多の正實かる勢ひに尚又十分かる勢を
以て眞の攻伐所を攻伐するを要そ
第四百六十五章敵陣の翼の一に攻伐するハ
敵を此側面にて攻伐し且此陣地の背に到らん
ことを務むるに守禦兵の翼の一若し據托しも

らさるとき又は軍旅と連結せる攻伐隊を以て施行し得るなり

又茲に攻伐兵守禦兵を真の攻伐所の為に私誘せんことを務め且佯勢或側攻に由て正面に於ぬてこれを挑むを要するこれ其間に攻伐を其側面に於ぬて施行せんとする為なり

翼の前に在る蔽蔭の地形はこれか為に便宜の助となるなるしいのんとかきは此地形攻伐の施設を蔽隱するにへなり

攻伐兵敵の翼を追却せんとの為に要用なる時間

いこのにも僅このなるを愈速に其全戰勢を攻伐の應援に用ひ得るなるしいのんとかきは志かるとき又は其目的を隱して永く保持するを要せさるへなり

敵翼若し兩このら據托しあるとき又は今其他の距離にて環遶を施もその特別なる隊伍を以て此の如き側面攻伐を行ふを要するなり此側面攻伐は却て難く且又却て危くあるなり環遶を施もその隊伍を其目的を達せんことの妨けらるる且時としては過勢に攻伐せらるるて全く追ひ散ら

ざを得るほとさやうなる又あるとあいねる災害
なる遭ひ得ることりホリ地なるてフランス兵の左
翼を環遶せるを要しつるオーステンレイキ人
の縱隊を斯くあるべきことくなこのべ
故なる此運動も唯大かる過勢なる就て有功かる指
揮官の部下千變万化迅速の軍兵を以て而已施
行せ能し千七百九十六年カスチクリオ子地の
野戰千八百零九年ワタラム地の野戰および千
八百十一年アルヒエラ地の野戰なおわて此の
如き環遶の運動あるべ

第四百六十六章　敵陣の兩翼なる為その擁擊攻
伐へ甚危き攻伐の形格かるとも此時なる方ても
攻伐兵其軍旅を屹と二分せるを要せこと各半
を以て敵の一翼を攻伐せんゝ為かべ故なる此攻
伐なる就ても命令の一和を失ひ且てもハ各企の
なる施行なる甚害あるとそなこのもこもなる就て
へ尚隊伍の一此彼の時變なる由て止駐せらもし且
こもなる由て目的を達せ以或餘べ遲刻せることと
あるべ或守禦兵過勢を以て他の翼なる在る敵の縱
隊を攻伐し且追却せる其間偉の勢を以て此一

隊を止駐せるこあるとも
故に此の如き攻伐も十分に可かるといふ能か
らば或軍旅の各半を以て全敵軍の攻伐を抵抗
し得るほどに即少も他の半の救助し來る迄て
其間抵抗し得るやうに同勢の員數に於て大なる
る過勢を供ふるを要せ能し又此攻伐の形格も
若し敵軍の特別かる部分互に應援しあさハば
たとへ地形に由て己れに妨らるゝも或軍旅自
己の運動を能くらさること共原因となるもた
かることを知ると雖に應用し得たりとも再

時に八尚獨立に所置せんこを知るる甚有功
の指揮官を供へさるを得も
此攻伐形を成就せる成功に利あること翼の一
に為もその攻伐よりも大かる能したりとも翼
の一に為も攻伐の小利ハ又却て多の切實と却
て少の危險とを合併せるとも
第四百六十七章　敵軍の陣地を斷截せるハ此
軍旅の兩側最早陣地の弱き部位に屬せさるほ
とによく據托しあると雖に試驗し得能き而已
からも尚又此陣地甚蔓延しあり且敵軍の同勢

てゝ平均しあらをてゝ由て茲に正面に側面よりも弱き部位あるとき に試驗し得べし

此攻伐を重利を生し得いかんとかをへ若し其成就をるとき にハ敵軍二分に別かるゝこと此軍旅併後し得かさきと に由かて此利を攻伐兵若しこゝに由て守禦兵の走路を奪ひけるとき に尚大かてとをゝとも此攻伐を若し其失策をるとき に又攻伐をる軍旅に最大かる害を生し得いかんとかをへ此軍旅一弧圓中に環擁せらをし如く火兵の功用中其突進せる團軍

を守禦兵の軍旅に強迫せる敗亡を受くべし

中央を斷截をると同時に翼の一を迫脅をるハ初代ナポレオンの得意の千變万化かて起守禦兵若し廣き陣地を占め且攻伐兵戰力におゐて守禦兵に過勢を具有をるとき にハ此攻伐の形格大かる功利あて得をへきとをゝこゝを決定をる攻伐所に戰力不足をゝ為き の危險に臨むかて成就せる斷截の証例を千八百零五年アユステルリッツ地の野戰千八百十二年サラマンカ地の野戰千八百十四年モントミライル地の野戰お

よひ千八百十五年リクニー地の野戰に在るかと千八百零九年エスリンケンおよひワクラム地千八百十二年ボロチナ地およひ千八百十五年ワーテルロー地の野戰におかぬても常に一部分或全く成就せさるぬ

第四百六十八章　各野戰も戲場の如く同く甚種々かる三時刻に分このち得：戰の誘導發動およひ決定是かと」此時刻復ひ戰机に分うつ第二時刻ハ殊に志ろとそこに由て了解を爲ねかもかる變動かと殊に戰の經過に感動を爲

さしめ且戰中宛も休憩所となる地位の周邊の戰鬪かと」此誘導戰ハ殊に野戰を書記もるに方て一元のよく貯へらきあるの利あるか」該に此時刻の各に於るかもかる變動を落解を爲」第四百六十九章　第一時刻ー誘導もる戰鬪ハ前拒に由てもるものにして靜肅にて周障せさる所置に就て一般の性質あるを要もこきに就てハ攻伐兵全く餘と早く一般の戰鬪に係らさるに注意もるを要もこきに敵或陣地攻伐兵の料察もるとも強くあるを識破もると尚即時

に戰鬪を止め得んが為めにこれを殊に注目せざるべからざるの點多の戰力を改伐に就て直に動作せしむるに愈多く所置の自由を妨くるに在るかなり此法則に注意せざるべからざる時期に戰鬪を止めあたはざるとき此時刻に在るの戰鬪は多分撤兵戰にして或る野砲こまに應援し然るには中砲および騎兵こまに應援せるこまに就て要用かる監察を施行し得るこは多く撤兵を引卒する部將官の指揮および判斷に關係するこは此監察は丘陵および

他の地所を侵棄せんことを務むるを要するとへ又實檢の完成してある迄て其間を唯停立してあるこを得るも其處よりして陣地に在る敵軍の實檢成こを得るかなりこは此侵棄せる地形の障碍若し軍旅の戰地に進入するに要用かるとき或其障碍の地若し攻伐の其他の便宜かる經過に要用にあるこを得るときには十分かる勢を以て此地形の障碍を守備し且頑強に守禦するを要こを此一事を初代ナポレオン其野戰の誘導に就て決して怠らざるこの所かなり

茲に今多の軍兵戰鬪に到る度に從て攻伐の全發動に移轉せるを准備せ」ざるべからざるも此移轉も卒然に成らしめて殆と注意を惹こらさるほどに漸々に成るかを此の如く為して前拒戰成て且其他攻伐に施設を為せ其間に軍隊戰地に到着して且已に指示せらるる部位に戰列に列せといへとも每に務て蔽蔭して歩兵ハ二隊に位列せるに每バタイロン擺開距離にて密收縱隊に於ても騎兵および砲兵并に游兵も歩兵の後務て多く敵

の眼目に遁れて位列せ上將も今其部將を併合して且施せ惹き野戰に就て其注視をこれに申令して短くして尚定まる言語におゐて此部將の各ハこれに就て何の課業を充させ惹ものをこれに教へ且戰地の何の部位にて側攻を以て敵を挑むを要せるこの且佯勢を以て何處に敵を挑むを要せるるからひに陣地の眞の鎖匙所せいこの在るこのをこれに示せ」此上將決戰の攻伐に轉せる以前戰鬪に由ていこのかる成功を得あるを要せるこの且敵を何れの

方向ニ追却セるを要セるこの尚又兼て若し不便宜の落成ニ由て退陣ニ已を得さると紀ニハ何もの道路ニてこもを為セを要セるゝを其部將ニ説示セ終ニ上將戰の際何處ニ止駐し且其部將の注進を何處ニ待つ亟紀このをこもニ知らし也部將ゝ其上ニて其隊伍の方ニ急行セこも攻伐ニ要用かる施設を為さんゝ為かア

上將ゝ今高く在る位置の方ニ赴くかアたもへ遠離せる距離ハ諸事を目擊し或要用かる命令を充分速ニ命せんこと容易からさるゆへニ指

揮の多を其部將ニ委任セるを要セるといへとも戰地を通覽し且戰を號令し得る所の高くある位置ニ到るかア自身ニ戰群到らんことハ戰を指揮且號令せんゝ為ニ不適當を為セ亟危險およひ決戰の時机ニおゐて諸事若し軍兵の剛勇ニ關係セるとき紀而已ゝ將帥戰士の先頭ニ在るかアこもを其例を以て此戰士の勇氣を奮激せんゝ為かア

第四百七十章　第二時刻カラユスウイッツかる者こもを名て實ニ併合所業かアといふこもハ

通常攻伐兵の諸般の縱隊已に示さゝる敵陣の部位に烈砲放砲を以て始むる是なり

此時に攻伐兵の砲兵攻伐を爲部位を强く射撃し且敵の放砲を默せしめんが為に便利なる陣地を取りけるかゝこゝを定まる軍兵

乙を蔽護を

歩兵縱隊の第一陣敵の動作を爲砲放砲中に到るや否に此點放に對して地形に守護せらるゝ

るゆとは擺開を第二陣は第一陣を三四百歩に踵砲敵の放砲に餘り多く屈を爲くあるとは

も縱隊に在る爲し

騎兵は歩兵の後と敵の默放の及達外にして通常机會若し各時机に攻伐をるに便宜かるとは

に各時机に攻伐せんが為め或敵の騎兵に對して味方の軍兵を守護せんが為に准備して縱隊に在るかり

今為を所の戰闘は連綿たる放砲と放銃と山て互の戰力を破却せんこの為の目的兩敵に在るかり戰塊いかに大かを愈永く戰闘決せゞある爲しいつんとかを歩兵時机の敗失を償

ひ且權衡を復せハかア
戰鬪ハ各分地形物の在地の周邊ニ在る亟し此
戰鬪ハ甚だ血戰かる亟しいうんとかきハ此物
体頑强ニ守禦せらるを屢取らるを且取返さる亟け
るハかア此在地若し守禦兵の陣地の寄托所ニ
して其寄托所の敗亡攻伐兵の中央を斷截し或
時として陣地を側面の一ニ擁環して攻伐せる
の原因とかア得るとだニハ妹ニたこのアとを
上將ハ戰の經過および其受くる所の汪進上ア
して戰陣の何の部分を應援せるを要せるこのを

見るといへとも此應援を以ていハ貯ふ亟くあア
且唯若し其十分要用ニあるとだニ而已ニをを
授與せるを要を」將師の最大かる術ハ戰の際敵
軍の多を戰鬪中ニ誘引せるニ在アて且將帥決戰
の時机ニ强だ游兵を貯ふるの間敵軍をして其
戰備を失かハしむるニ在るかア

第四百七十一章　〔第三時刻〕ニをハ戰力の連綿
たる勉勵且疲勞ニ由て兩敵間の權衡を失かハ
んことを始むるや否ニ在るかア」上將若し天秤
の此方ニ傾側せんことを始むるを見ると だニ

ハ游兵を驅進せしむといへとも又早くも驅進せしめはいかんとかきハ決戰の方ニ不時ニ進歩をること激動せさる戰塊ニ衝突しつるの原因とかも得るきもへかたし攻拔縱隊の攻伐ニ轉をる以前ニ上將砲兵一團軍を以て敵のおもかる攻伐を為さんとし或斷截せんとをる其部位ニて敵を射擊せしむ

上將今若し砲類の充分功利を見るとをハ攻拔縱隊を驅進せ且此縱隊ハ銃槍を以て敵を攻伐せ此攻伐成就し且敵退却をるとをハ騎兵

と騎砲兵と俱ニ戰勝の功を收むるを要をる」、

去ハとも二きハ戰の決定敵を逐從せんを為ニ尚ハ晝の一二時殘るをとさやうニ早くあるけるこのニ關係をる」をろ〳〵て戰勝兵此利を得んことを求むるを要をいかんとかきハ戰而已の際々雙方の軍兵の敗亡唯強をを逐從ニ由て而已野戰ニ決定の功あるほとニ通常互ニ僅ニ異ニあるをけきハかニ

第四百七十二章　陣地の訓習の論載ニ就て其兵法の品位ハ已ニ守禦兵の為ニ論載しあニ又

建築せる戰地に在るの利此論載に著ハしあるか」故に守禦兵の所置に就てハ茲に甚簡略に在て得るべしいろんとかきハ其おもかる所作ハ其陣地のよ紀設備に在きハかて

第四百七十三章　第一時刻守禦兵ハ其前に在る軍兵の助を以て同勢形勢およひ凝き攻法を敵の進入に就て捜索せんことを務むるを要も」此兵ハ攻伐兵の其陣地を監察し且其軍兵の布置を實檢もるを務て多く抵抗もるを要も此目的にて此實檢の成て得る所の地所を強く守禦

もるを要も殊に攻伐兵の其游兵の布置およひ同勢を知らんことを妨くるを要も

第四百七十四章　第二時刻是におかぬてハ守禦兵攻伐兵の如く同く戰鬪中に致もの軍兵を以て貯ふべくあて且甚强紀游兵を後に保持もるを要も

此守禦兵もこきを攻伐兵よてもよく爲し得べしいろんとかきハ守禦兵其火兵をよく用ひ得きハかて」此兵ハ殊にこきに注意しあるを要もこき其陣地の鎖匙所を強く守備し且强紀游兵

を以て應援せんゝ為めかてこゝに敵佯勢或側攻に由て此部位の戰力を遠離せんゝ為の努力を盡さんこゝとを算もるを要も其陣地の側面へよく據托しあるを要も若しこゝを為に絶て容易かるこゝとあらさるとゝ如ハ後方およひ側方にして敵の面前外に游兵を布置もるを要も此游兵も敵側面に向て環遶の運動を為もや否其代に側面におかゐてこゝを攻伐もるかこ

側面若しよく據托しあもといへとも陣地尚全

く蔓延しあるとゝ如或茲に若し陣地に或る弱如部位在るとゝ如に游兵中央の多く後にして走路の近くに其地位を持つを要も而し戰の此時刻におゐてい茲に攻伐兵の所置と守禦兵の所置との間に一の大かる差異も多くあるこゝとかしゝたゝして守禦兵机會をこゝに便宜に見るや否に又攻伐に轉し且攻伐兵をして加勢を受けて復ひ攻伐に轉もるまて地所の後に守禦せんゝ為に屢已を得さらしむ兩敵の戰力若し甚多く異こあらは且守禦兵攻伐兵の蔓延

して環遶する運動を為すを識破すると雖とも
敵の中央にておもかる攻伐に轉し得るべきと
初代ナポレオン　アユステルリッツ地にて為し
つるう如くこの
守禦兵若し其游兵の敵の游兵に比して強く弱
いるこをを始むるを見ると雖とも戰鬪を息め
んろ為の時刻茲に在るかといいんとかきハ戰
鬪の經過中に在るの諸敗亡を軍兵に由て游兵
よりを復し得るを要するを目今の野戰の固有性
かきハかを是故に尚ほ強敵游兵を具有する其

間々戰鬪を主張し得るかきとも其游兵敵の游
兵よりも却て弱くかりけるの時机よりして茲
に尚戰鬪に他の回轉を授與し得る所の生軍兵
進路に在り得るあらさきを決戰を全備せり
として考察するを要す
指揮官の當時尚ほ施すべ所の諸事ハ一に特
別かる摸やうに關係し一に此指揮官の天稟
の剛勇および活斷に關係を若し成るべきから
ハ戰鬪を日の暮るまて延引せんことを務む
を要するきとを兼て戰鬪を無智短慮に主張

そるを甚不便宜かる模やうにて全くの敗績に至ることを算そるを要そ：初代ナポレオンのワーテルロー地に於るブロイセン人のイエナ地に於る是かこと

第四百七十五章　第三時刻今敵の攻伐を尚一二時間抵抗せんを為に戰闘を引受けくる游兵の守護にて軍兵を陣隊よりして後方に集復そ且貯藏物輸車帶傷人および生虜八或別隊歩兵および輕騎兵の護送にて是を送り遣るかこと集復せる軍兵ハ敵に地面の各フートを爭ふの

游兵を應援ー或後方に取をる退陣地にとをを色藏そ軍兵の尚最纔に屈ーけるものよりして強紀後拒を聚成そ且此後拒の為にを旋軍に就て已に舉止則を論載ーけるかこと

軍旅の退陣の方向を其正面線に直角に在こと或をを平行ーあこと得をくをとも唯此平行をる方向ハ自國におぬて若ーとをに由て其預備所およひ倉廩よこと遠離そると紀に施行ー得紀而已千八百零九年ウクラム地よこホヘメン地に第一等のヘルトフ宦カールル氏の退陣およ

ひ千八百十四年オルテセ地よりトユロユセ地ヨリソユルト氏の退陣ハ此例ヨ供用シ得軍旅の退陣を併合シ成るを要を軍兵の諸般の隊伍の全自別かる道路を通行をるを要をる散亂の退陣ハ一般ヨ選除を退陣ヨ就て軍旅を一所ヨ保持をるを要をるハ甚自然の理かアいう。んとかをハ唯こをヨ由て而已敵ヨ尚軍威を示シ得をハかを」是故ヨ軍旅ハ一路を通行をるを要せしてこをヨ縁て縱隊を行進せしめんう為ヨ諸の平行をる道路よを味方を獲得シ志

このをとを此縱隊ハ獨立ヨ聚成シあるを要を誓校の甚適當せる目的とシて次の野戰を舉示を

攻法野戰

翼の一ヨ為をの攻代

千七百九十六年アルコレ地ヨてボナパルテ氏の野戰

千八百十年アルビエラ地ヨてソユルト氏の野戰

千八百十二年サラマンカ地ヨてウエルリン

クトン氏の野戰
千八百四十九年ナハラ地ヨテラテツキ氏の野戰
千八百五十四年ハラクラハ地ヨテリュス人の野戰
兩翼ヨ為モその攻伐
千八百零五年カルチーロ地ヨテマスセナ氏の野戰
千八百十三年リュトセン地ヨテナポレオン氏の野戰

千八百十三年レイプシク地ヨテ同盟兵の野戰
千八百十四年アルキスユルアユヘ地ヨテスクワールツンヘルク氏の野戰
中央の斷截
千八百十五年ワーテルロー地ヨテナポレオン氏の野戰
千八百四十九年フレテリキア地ヨテブユロウ氏の野戰
千八百五十四年インケルマン地ヨテメンチ

コフ氏の野戰

中央の斷截を以て兩翼の一を為その攻代

千八百零九年ワクラム地にてナポレオン氏の野戰

千八百十一年サキュント地にてスユケット氏の野戰

千八百十五年リグニー地にてナポレオン氏の野戰

守禦の野戰

火かる攻法の所置を以てする守禦

千八百零五年アユステルリッ地にてナポレオン氏の野戰

千八百十三年ドレスデン地にてナポレオン氏の野戰

小かる攻法の所置を以てする守禦

千八百零九年タラヘラ地にてウエルリンクトン氏の野戰

千八百十年ブユサコ地にてウエルリンクトン氏の野戰

千八百五十五年ツセルナヤ地ユて同盟兵の野戰

純粹の守法野戰

千八百十三年バユツエン地ユて同盟兵の野戰

千八百十四年カラオン子地ユてウオロンソフ氏の野戰

慕氏兵論第四編高級兵法卷四畢

早稲田大学図書館
011888007042